様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５　年６月１１日現在

機関番号：３１３０７
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２００５２
研究課題名（和文）　古代インド宗教生活における「髪と鬚」の象徴性

研究課題名（英文）　Symbolism of hair and beard in the ancient Indian religious life

研究代表者
後藤 純子（阪本 純子）（GOTOU JUNKO）（SAKAMOTO JUNKO）
宮城学院女子大学・付置研究所・研究員
研究者番号：60275237

研究成果の概要（和文）：200 字程度

髪と髭の取扱は古代インドの宗教儀礼と社会慣習とにおいて重要な役割を果たした。生命力を象徴する髪と鬚を伸ばし続けることは超越的能力をもたらすとされ，ヴェーダ以来の聖仙や苦行者の特徴である。他方，髪・鬚の除去は世俗的存在と聖なる存在との間の移行，すなわち死と再生を象徴する。その典型が仏教やジャイナ教の出家・入門における髪・鬚の除去である。祭式などの場合は，開始時と終了時に髪・鬚を除去し，実行中は伸ばし続けるという複合型が見られる。

研究成果の概要（英文）： How to treat one's hair and beard, which symbolized vital power, played an important role in ancient Indian rituals and customs. Growing their hair and beard long characterized ascetics, saints, etc. and was considered to bring them supernatural power. On the other hand, removing one's hair and beard symbolized one's death in a secular (/sacred) life as well as rebirth in a sacred (/secular) life. A typical example is found in the ceremony of admission into the Buddha's or Jina's Order. A complex pattern is observed in Vedic rituals: the sacrificer's hair and beard are removed at the opening, let grow during ritual performance and once again removed at the closing.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：印度哲学・仏教学
キーワード：(1) 印度哲学 (2) 仏教学 (3) 宗教学 (4) 美術史 (5) 民俗学

１．研究開始当初の背景

「髪（鬚，体毛，爪など）に特別な力が宿る」という考えは，世界の諸宗教および民間説話に広く見出される。インドにおいても，髪（鬚，体毛，爪など）には宗教的な意味が与えられ，祭式・儀礼や社会慣習において特別な取扱を受けてきたが，それらの意味を体系的に考察する研究はこれまでなかった。

本研究代表者は中期インド語動詞に関する論文(Deleu 教授記念論集 1993)を執筆中に

「髪（と髭）を取り除き・・・出家する」という仏教とジャイナ教とに共通する定型句に出会った。どのような理由で髪と鬚の除去が出家の必須条件とされるのかという疑問を抱き，同時代および先行する文献を見渡したところ，髪（鬚，体毛，爪など）の取扱がヴェーダ以来の宗教儀礼において重要な役割を果たしてきたことに気づいた。

髪と鬚の除去は仏教・ジャイナ教の出家や教団入門にとどまらず，ヴェーダ祭式やヒンドゥー儀礼においても重要な構成要素であり，世俗化されて社会慣習や日常生活に取り込まれている。

他方，髪（鬚，体毛，爪など）を意識的に伸ばし続けることも，リシ（聖仙）や苦行者などの特徴として知られており，この伝統は現代インドにも生き続けている。

さらに最初に髪と髭を除去した後，髪と鬚を伸ばし続け，最後に再び髪と髭を除去するという複合パターンが祭式やヴェーダ学習などの実践に見られる。

髪と髭とを除去することと，伸ばし続けることという，一見，相互に矛盾する現象には，仏教・ジャイナ教・バラモン教・ヒンドゥー教等の相違を越えて，インド思想として共通の基盤と方向性が見出されると予想された。その結果，本研究代表者は，髪・鬚等に関する儀礼の根底にある思想が何か，どのように歴史的に発展したかという問題の解明を課題とするに至った。

本研究に先行する予備的検討として，仏教の出家除髪の意味と起源を考察し，論文「髪と鬚」を執筆した（1994 年日本仏教学会年報「仏教における聖と俗」)。1999 年に Mette 教授記念論集に執筆依頼され，ドイツ語論文“Symbolik von Haar und Bart im Brahma-nismus, Buddhismus und Jinismus”を準備したが，ページ数超過のため掲載を断念した。

その後，ヴェーダから仏教・ジャイナ教に至る「輪廻と業」理論の形成過程の研究に携わる過程で，「髪と鬚」の問題が「死と再生」の思想と深く関わることを改めて認識し，古代インドの宗教生活と世俗生活において「髪と鬚」の持つ思想的な意味を，より広い視野で包括的に研究することを企画した。

２．研究の目的

(1) 古代インドの宗教生活において，髪と髭（および体毛，爪）の持つ象徴的な意味とその取り扱い（切る・剃る，伸ばす，特定の形にする等）に関する原則を解明する。個別宗教の次元にとどまらず，バラモン教からヒンドゥー教・仏教・ジャイナ教に至るインド諸宗教を貫き，また，一般人の社会や個人生活をも規制していた，共通の原理を探求し，その原理の発展・変容を歴史的に跡づけ，個々の宗教の関係と相対年代を推定する。

(2) 文献資料と考古学・美術資料とを照合し，相互の関係を考察することにより，片方だけでは解決困難な問題（例えば仏陀の大人相「肉髻（ウシュニーシャ)」）を解明する。

(3) 「髪と鬚」という視点から，宗教思想・儀礼と日常生活・社会慣習との関係とその歴史的変化を考察する。

３．研究の方法

紀元前 12 世紀頃から紀元後 5 世紀頃までのインドの文献と美術・考古学資料から「髪と鬚」に関して可能な限り多くの実例を収集し，比較検討する。厳密な文献学による原典の正確な理解を基に，宗教思想，社会生活，造形表現等の重層的視点から考察する。

(1) 古代インド宗教文献に残る儀礼，戒律，ならびに法典や民間風習において，「髪と鬚」（さらに体毛，爪，皮膚・垢）がどのように扱われているかを文献学的に精査し，原典を正確に訳す。具体的には下記文献を対象とする：リグヴェーダ，アタルヴァヴェーダ，ブラーフマナ，ウパニシャッド，祭式教典（シュラウタ・スートラ，グリヒャ・スートラ)，法典（ダルマ・スートラ，ダルマ・シャーストラ)，アルタ・シャーストラ，叙事詩，古典文学，仏教聖典，ジャイナ教聖典など。

(2) 上記の文献材料を宗教思想として分析し，共通するパターンに基づき分類する。髪と髭（体毛，爪，皮膚・垢）の取扱の根底にある思想を明らかにし，その歴史的変化を社会状況との関連において考察する。

(3) インドおよび周辺地域（中央アジア，ペルシャ，ヘレニズム文化圏）の美術的・考古学的な資料において，髪・髭（体毛・爪）ないし沐浴の表現を収集し，文献の調査結果と比較照合する。文献と造形表現との相違・矛盾について文献学，美術史，思想史という多層的視点から考察する。

(4) 上記の調査・考察の結果を体系的にまとめ，和文および欧文での出版原稿を準備する。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

①「髪と髭の取扱」という視点から宗教儀礼や社会習慣を検討・考察することにより，「死と生(再生)」および「聖と俗」に関する思想と儀礼の構造とその変遷に関し，以下の諸点を明らかにした。

[1] 生きている限り絶え間なく伸び続ける髪や髭（体毛・爪，さらに皮膚）は，生命力の象徴とされる。リグヴェーダ以来，現代に

至るまで，リシ（聖仙），ムニ，ブラフマチャーリン（ヴェーダ学習者），苦行者など，世俗を離れた聖なる存在として特殊能力を持つ者たちは，長く伸びた髪や鬚を特徴とする。髪や鬚を伸ばし続けることは生命力を体内に蓄積することであり，その結果，超人的能力をもたらすと考えられたと推測される。（性的禁欲，すなわち精液を放出しないことにより自己の能力を体内に蓄積する行為との類似が注目される。）

［2］他方では，すでに伸びた髪・鬚（体毛・爪）は古い皮膚（すなわち垢）と同様に「老廃した，死んだ，不浄な」ものとみなされた。聖なる行為の前には，髪と鬚の除去が沐浴と並んで浄化のために必要とされた。

［3］月の朔望毎に髪と鬚を除去する風習が，新満月祭の準備行為と結合して，古くから成立していた。リグヴェーダ以来，月の朔望は月の死と再生のサイクルと見なされた。朔望毎の髪と鬚の除去は，自然周期と同調して人も周期的に無垢の状態に戻り，満月・新月の聖なる夜を過ごすことを意味する。時代とともに宗教的意味が薄れるが，朔望毎に髪と鬚を整える風習が民間に残る。

［4］髪と髭の除去と伸ばし続けることの複合型が祭式や苦行，ヴェーダ学習などの聖なる行為を行う場合の基本的な枠組となる。

A) 開始時に髪と髭を除去し沐浴する。

B) 聖なる行為を実践する間，宗教的責務（ヴラタ）を遵守し，髪と鬚を伸ばし続ける。

C) 終了時に再び髪と鬚とを除去し沐浴する。

開始時と終了時の髪・鬚の除去（および沐浴）は，世俗的存在ないし聖なる存在としての死と，聖なる存在ないし世俗的存在としての新生を意味し，「死と再生」および「俗と聖との転換」を象徴する。聖なる行為の実践中に髪・鬚を伸ばす意味は［1］に述べた。

［5］上記のような基本原則はヴェーダ期に確立していたが，時代と共に，髪・鬚の取扱に宗教的な意味が弱まり，階級・家柄・身分ないし人生の諸段階（四住期）の表象という社会的な意味が強まる。また，頭髪の完全な除去を嫌悪する傾向が強まり，バラモンは頭頂部に髪束を残すようになる。頭髪の完全な除去は，贖罪や刑罰の 1 種ともなる。

［6］紀元前 5 世紀頃に非バラモン系修行者（「沙門」）たちが多様な革新的思想を展開し，その中から仏教やジャイナ教が成立した。バラモン系修行者が苦行者の伝統に則り長髪を保持する（［1］）のに対し，非バラモン系修行者は無髪（「坊主頭」）を特徴とした。世俗生活を捨て修行者となる（出家する）時，髪と鬚を完全に除去する慣行は，世俗的生存における死と修行者としての新生を象徴し，ヴェーダにおける除髪儀礼を継承する。

［7］仏教・ジャイナ教における出家・入団・修行はブラフマチャーリンの入門とヴェーダ学習を継承する性格がある。四住期の 1 つである遊行期との類似も注目される。仏教・ジャイナ教の教団生活における髪・鬚の取扱は「沙門」としての共通の起源から出発するが教団の発展とともに相違が増大する。ジャイナ教では「死と再生」の象徴性が薄れ，苦行的性格が強まる。

［8］仏伝とジナ伝には髪・鬚に関しても共通する要素が大きい。仏陀・ジナの神格化に平行して，その髪・髭の表現が文献においても造形においても変化する。ガンダーラ系仏像では髪や髭が表現され文献資料と矛盾する。仏陀の大人相の一つ「肉髻（ウシュニーシャ）」は，ゴータマ仏陀の出身階級クシャトリヤに特有の「（戦闘時に）頭髪を束ねる布（「鉢巻」）」が「頭頂部の肉の膨らみ」と解釈されて成立したと推測される。

② 3.(1)に挙げた文献の当該箇所を原典批判，翻訳，注釈にわたって精密に検証し，信頼性の高い資料を作成した。

③ 京都大学大学院集中講義（2010 年 12 月）において上記の研究結果の概略を講義参加者（准教授，講師，助手等を含む）に示し，相互の知見を深めた。

④ 上記研究結果の中，仏教・ジャイナ教の出家と教団生活における髪・鬚の取扱を中心として，『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』招待論文「出家と髪・鬚の除去―ジャイナ教と仏教との対比―」を執筆した。

⑤ 「髪と鬚の象徴性」の根幹をなす「死と再生」の思想の成立と発展に関して，龍谷大学現代インド研究センター第 8 回伝統思想研究会に招待され講演した。2013 年度に同大学 RINDAS 伝統思想シリーズから出版される。

(2)国内外における位置づけとインパクト

① 哲学・思想と生活習慣・風習とは別次元の問題として考察される傾向が一般に強いが，「髪と髭の扱い」という一見ありふれた行為には宗教と日常生活の接点がある。これを切り口として，インド古代思想の歴史的変遷の具体的な解明を目指す本研究の試みは，国内外において先例のない独創性を持つ。

② ヴェーダからヒンドゥー教，仏教，ジャイナ教に至る多様な宗教思想を歴史的発展のダイナミズムの中で総合的に考察する本研究は，18 世紀に欧米で確立したインド学の正統的な研究方法に則るが，細分化され相互交流の乏しくなっている今日のインド学において稀少であり，インド学の総合的発展と活性化に資すると期待される。

③ 言語研究に裏打ちされた文献学を基盤に，宗教学・民族学・美術・考古学等の視点を柔

軟に取り入れる学際的方法はインド学に新しい可能性を開いたものと信じる。特に，仏教学と美術史において長らく論議されてきた大人相の「肉髻」の解明は大きな貢献と自負している。
④「髪と髭」という具体的な事例を通じて，インド独自の現象と人類に普遍的な事象とを区別し，インド文明の特質を明らかにすべく努めた。
⑤「髪と鬚」の取扱が宗教的意味を失い社会的・個人的慣習へと変遷する過程を明らかにしたことは，現代社会に占める宗教の位置を考察する上で，１つの材料を提供する。
⑥ ヴェーダ，仏典，ジャイナ教典の原典の多数の箇所において，国内外で初めての翻訳，既存の翻訳と異なる新解釈，術語の語源解明を行った。

(3)今後の展望

東日本大震災により研究室・書庫が大きな被害を受け，研究成果の学会発表および出版準備を計画通りに行うことができなかった。

本研究の成果を早急に和文および欧文で出版することを目指す。欧文原稿には学識ある外国人の助言・訂正を予定する。

また国内外において，研究成果の学会発表や講演を積極的に行いたい。

なお，研究成果をできるだけ早く公開するために，ホームページを開設した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① Junko Sakamoto-Gotō, The Naksatra System in the Vedic Calendar, 印度学佛教学研究，査読有，63 巻 3 号，2011，1075―1083

〔学会発表〕（計５件）

① 阪本（後藤）純子，生命エネルギー循環の思想―業と輪廻説の起源を求めて―，龍谷大学現代インド研究センター第８回伝統思想研究会（招待講演），2012年12月3日，龍谷大学
②Junko Sakamoto-Gotō, A Dialog between Yājñavalkya and King Janaka on the ultimate Agnihotra ― ŚB-M XI 3,1, ŚB-K III 1,4, JB I 19f., VādhAnv II 13 ―, The 5th International Vedic Workshop（招待発表），2011 年 9 月 23 日，ブカレスト，ルーマニア
③ 阪本（後藤）純子，音節と mātrā―インド韻律の基礎概念―，日本印度学仏教学会第２３回学術大会，2011 年 9 月 7 日，龍谷大学
④ 阪本（後藤）純子，「古・中期インド・アーリヤ語文献の韻律の概観とマートラーチャンダス・ガナチャンダス」， 2008～2010 年度科研費基盤研究（B）『ヒンディー・ウルドゥー韻律のリズム構造の解明―ペルシア起源説の検証をとおして―』（代表者：長崎広子）第 6 回研究会，招待講演，2010 年 6 月 12 日，拓殖大学
⑤ 阪本（後藤）純子，Veda-Saṁhitā と Brāhmaṇa における Nakṣatra「月宿」の列挙と数―Veda 暦と祭式(2)―，日本印度学仏教学会第６１回学術大会，2010 年 9 月 10 日，立正大学

〔図書〕（計２件）

① 阪本（後藤）純子，龍谷大学現代インド研究センター，生命エネルギー循環の思想―業と輪廻説の起源を求めて―（RINDAS 伝統思想シリーズ），2013（印刷中），約 100
② 阪本（後藤）純子，他，佼正出版，奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集， 2013（印刷中），316-331（「出家と髪・鬚の除去―ジャイナ教と仏教との対比―」）

〔その他〕

ホームページ等

http://sakamotogotojunko.jimdo.com/

６．研究組織

(1)研究代表者

後藤 純子（阪本 純子）
（GOTOU JUNKO）（SAKAMOTO JUNKO）
宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所研究員
研究者番号：６０２７５２３７

(2)研究分担者　　　　　　該当者なし

(3)連携研究者　　　　　　該当者なし